



プロダクション内での EDIFACT ドキュメントのルー テイング

Version 2024.1

2024-06-06

プロダクション内での EDIFACT ドキュメントのルーティング
InterSystems IRIS Data Platform Version 2024.1 2024-06-06
Copyright © 2024 InterSystems Corporation
All rights reserved.

InterSystems®, HealthShare Care Community®, HealthShare Unified Care Record®, IntegratedML®, InterSystems Caché®, InterSystems Ensemble®, InterSystems HealthShare®, InterSystems IRIS®, および TrakCare は、InterSystems Corporation の登録商標です。HealthShare® CMS Solution Pack™ HealthShare® Health Connect Cloud™, InterSystems IRIS for Health™, InterSystems Supply Chain Orchestrator™, および InterSystems TotalView™ For Asset Management は、InterSystems Corporation の商標です。TrakCare は、オーストラリアおよび EU における登録商標です。

ここで使われている他の全てのブランドまたは製品名は、各社および各組織の商標または登録商標です。

このドキュメントは、インターシステムズ社(住所: One Memorial Drive, Cambridge, MA 02142)あるいはその子会社が所有する企業秘密および秘密情報を含んでおり、インターシステムズ社の製品を稼働および維持するためにのみ提供される。この発行物のいかなる部分も他の目的のために使用してはならない。また、インターシステムズ社の書面による事前の同意がない限り、本発行物を、いかなる形式、いかなる手段で、その全てまたは一部を、再発行、複製、開示、送付、検索可能なシステムへの保存、あるいは人またはコンピュータ言語への翻訳はしてはならない。

かかるプログラムと関連ドキュメントについて書かれているインターシステムズ社の標準ライセンス契約に記載されている範囲を除き、ここに記載された本ドキュメントとソフトウェアプログラムの複製、使用、廃棄は禁じられている。インターシステムズ社は、ソフトウェアライセンス契約に記載されている事項以外にかかるソフトウェアプログラムに関する説明と保証をするものではない。さらに、かかるソフトウェアに関する、あるいはかかるソフトウェアの使用から起こるいかなる損失、損害に対するインターシステムズ社の責任は、ソフトウェアライセンス契約にある事項に制限される。

前述は、そのコンピュータソフトウェアの使用およびそれによって起こるインターシステムズ社の責任の範囲、制限に関する一般的な概略である。完全な参照情報は、インターシステムズ社の標準ライセンス契約に記載され、そのコピーは要望によって入手することができる。

インターシステムズ社は、本ドキュメントにある誤りに対する責任を放棄する。また、インターシステムズ社は、独自の裁量にて事前通知なしに、本ドキュメントに記載された製品および実行に対する代替と変更を行う権利を有する。

インターシステムズ社の製品に関するサポートやご質問は、以下にお問い合わせください:

InterSystems Worldwide Response Center (WRC)
Tel: +1-617-621-0700
Tel: +44 (0) 844 854 2917
Email: support@InterSystems.com

目次

1 EDIFACT の概要	1
1.1 EDIFACT ドキュメントに対する InterSystems IRIS サポート	1
2 EDIFACT の操作に使用可能なツール	3
2.1 EDIFACT スキーマ構造ページの使用法	3
2.2 EDIFACT ドキュメント・ビューワ・ページの使用法	4
2.3 プログラムによる SEF ファイルのインポート	4
2.4 EDIFACT クラス	4
3 プロダクションの構成	7
3.1 EDIFACT ビジネス・サービスの追加	7
3.2 EDIFACT ルーティング・プロセスの追加	7
3.3 EDIFACT ビジネス・オペレーションの追加	7
3.4 EDIFACT ビジネス・ホストの接続	8
3.5 ビジネス・ホストの構成	8
4 追加の手順	9
4.1 EDIFACT スキーマの InterSystems IRIS へのロード	9
4.2 EDIFACT 用のルーティング・ルール・セットの定義	9
4.3 EDIFACT 用の DTL データ変換の定義	9
4.4 EDIFACT 検索テーブルの定義	10
4.5 EDIFACT ドキュメントの繰り返しの処理	10
EDIFACT設定のリファレンス	13
EDIFACT ビジネス・サービスに関する設定	14
EDIFACT ビジネス・オペレーションに関する設定	16

1

EDIFACT の概要

ここでは、EDIFACT 標準と EDIFACT に対する InterSystems IRIS® サポートについて簡単に紹介します。

EDIFACT (Electronic Data Interchange For Administration, Commerce, and Transport) 標準は、ISO (国際標準化機構) 標準の ISO 9735-6 としても知られています。

国連 EDIFACT 規則集は、構造化データの電子交換に関する一連の国際的に合意された標準、指令、およびガイドラインで構成され、独立したコンピュータ情報システム間での商品やサービスの取引について規定することを主眼としています。

1.1 EDIFACT ドキュメントに対する InterSystems IRIS サポート

InterSystems IRIS は EDIFACT ドキュメントを仮想ドキュメントとしてサポートしています。仮想ドキュメントはメッセージの一種で、InterSystems IRIS では部分的にしか解釈されません。この種のメッセージは、標準のプロダクション・メッセージ・ヘッダと標準のメッセージ・プロパティ (**ID**、**Priority**、**SessionId** など) で構成されています。しかし、メッセージ内のデータはメッセージ・プロパティとして提供されず、代わりに、処理速度を向上させるために内部使用のグローバルに直接格納されます。

InterSystems IRIS で提供されている各種のツールでは、仮想ドキュメント内の値にアクセスして、データ変換、ビジネス・ルール、およびメッセージの検索とフィルタリングに使用できます。基礎的な情報は、[“プロダクション内での仮想ドキュメントの使用法”](#) を参照してください。

2

EDIFACT の操作に使用可能なツール

ここでは、EDIFACT スキーマと EDIFACT ドキュメントの操作に使用可能な InterSystems IRIS® ツールの概要を示します。

2.1 EDIFACT スキーマ構造ページの使用法

[Interoperability]→[相互運用]→[UN/EDIFACT]→[UN/EDIFACT スキーマ構造] ページを使用すると、EDIFACT スキーマ仕様のインポートと表示を行うことができます。

このページでは、以下の操作を行えます。

- ・ このネームスペースにロードされている EDIFACT スキーマの表示。そのためには、[すべてのスキーマを表示] をクリックします。
- ・ InterSystems IRIS への EDIFACT スキーマのインポート。そのためには、[ファイルからスキーマをインポート] をクリックします。その後、[参照] を使用してファイルを選択し、[OK] をクリックします。
- ・ 保存されている EDIFACT スキーマの削除。そのためには、[スキーマを削除] をクリックします。その後、[スキーマ・カテゴリの選択] ドロップダウン・リストからスキーマ・カテゴリを選択して [OK] をクリックします。
スキーマが直ちに削除されます。

警告 [削除] の操作を元に戻すことはできません。

このページのテーブルには、以下の情報が表示されます。

- ・ 各行の左端の 2 列で、その行のスキーマ定義を一意に識別します。
 - [カテゴリ] – スキーマ・カテゴリを識別します。
 - [名前] – ドキュメント構造を識別します。

テーブルの行は、[カテゴリ] 列の数字と文字に従って並べ替えられます。

[名前] 列の各値はリンクです。このリンクをクリックすると、このスキーマ定義の EDIFACT ドキュメント構造の概要を示すテーブルが表示され、そのセグメントとフィールドもすべて表示されます。この表示内の任意のリンクをクリックすると、その項目の詳細をドリル・ダウンできます。InterSystems IRIS では、この EDIFACT ドキュメントの構造を定義するためにインポートされた SEF ファイルにある .SETS、.SEGS、.COMS、.ELMS、および .CODES の各セクションから、これらの詳細を抽出します。

- ・ [ベース] – カスタム EDIFACT ドキュメント構造の場合は、この列で、このカスタム構造がベースとする標準の EDIFACT ドキュメント構造を識別します。

- ・ **【説明】** – EDIFACT ドキュメントの内容を説明するタイトル。この **【説明】** に表示されるテキストは、コメントや注釈として入力する文字列ではありません。InterSystems IRIS では、この EDIFACT ドキュメント構造の定義のためにインポートされた SEF ファイルの .INI セクションから、このテキストを抽出します。

“[EDIFACT スキーマのプログラムによるインポート](#)” も参照してください。

カスタム・スキーマ・カテゴリの作成の詳細は、“[カスタム・スキーマ・カテゴリの作成](#)” を参照してください。

2.2 EDIFACT ドキュメント・ビューワ・ページの使用法

[Interoperability]→[相互運用]→[UN/EDIFACT]→[UN/EDIFACT ドキュメント・ビューワ] ページを使用すると、EDIFACT ドキュメントを表示して、さまざまな方法で解析することによって、使用する DocType を決定できます。また、変換をテストすることもできます。ドキュメントは、外部ファイルにすることも、プロダクション・メッセージ・アーカイブからのドキュメントにすることもできます。

このページの使用に関する一般情報は、“[ドキュメント・ビューワ・ページの使用法](#)” を参照してください。

2.3 プログラムによる SEF ファイルのインポート

SEF ファイルをプログラムによってロードする手順は以下のとおりです。

1. ターミナル・セッションを開始します。
2. 相互運用対応ネームスペースに変更し、以下のコマンドを発行します。

```
Do ##class(EnsLib.EDI.SEF.Compiler).Import(filename,"EDIFACT")
```

filename は SEF ファイルの完全パス名です。“EDIFACT” は filetype のクラス・デフォルト値をオーバーライドするために必要です。

このコマンドにより、SEF ファイルからデータがインポートされ、このデータを InterSystems IRIS 内でスキーマ定義として使用できるようになります。

3. InterSystems IRIS では、SEF ファイルの .INI セクションの先頭行の最初の部分を使用して、新しいスキーマ・カテゴリの名前を作成します。例えば、D96A.sef ファイルに以下の行があるとします。

```
.INI
D96A,,D 96A,UN,D96A,D96A schema
```

抽出されたスキーマ・カテゴリの名前は、D96A になります。

スキーマ名前付け規則に従い、SEF ファイルを編集してカスタマイズする場合は、まず、カテゴリ名を提供する SEF ファイルのテキストを変更し、カスタマイズするバージョンと InterSystems IRIS にインポートする他の SEF ファイルを区別できるようにすることをお勧めします。

4. SEF ファイルには、構文エラーが含まれている場合があります。その場合、InterSystems IRIS からエラー・メッセージが表示され、SEF ファイル内のエラーの場所が特定されます。

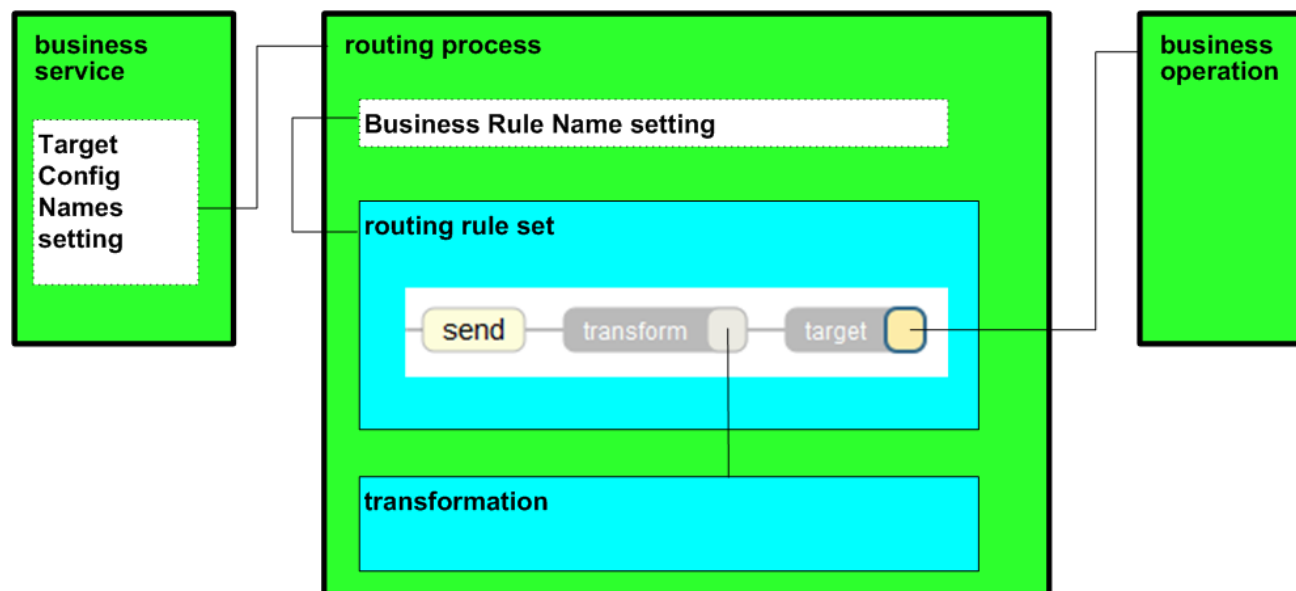
2.4 EDIFACT クラス

参照用として、このセクションでは EDIFACT ドキュメントを操作するために提供されているクラスを列挙します。

項目	クラス	メモ
ビジネス・サービス	<ul style="list-style-type: none"> EnsLib.EDI.EDIFACT.Service.FileService EnsLib.EDI.EDIFACT.Service.FTPService EnsLib.EDI.EDIFACT.Service.HTTPService 	クラス名が示しているように、これらの EDIFACT ビジネス・サービス・クラスのそれぞれで別々のアダプタが使用されます。
ビジネス・プロセス	EnsLib.MsgRouter.VDocRoutingEngine	このクラスは標準の仮想ドキュメント・ルーティング・プロセスです。
ビジネス・オペレーション	<ul style="list-style-type: none"> EnsLib.EDI.EDIFACT.Operation.FileOperation EnsLib.EDI.EDIFACT.Operation.FTPOperation EnsLib.EDI.EDIFACT.Operation.HTTPOperation 	クラス名が示しているように、これらの EDIFACT ビジネス・オペレーション・クラスのそれぞれで別々のアダプタが使用されます。
メッセージ	EnsLib.EDI.EDIFACT.Document	EDIFACT ドキュメントを仮想ドキュメントとして転送するための特殊なメッセージ・クラスです。
検索テーブル	EnsLib.EDI.EDIFACT.SearchTable	EDIFACT ドキュメント専用の検索テーブル・クラスです。

これらのクラスのサブクラスを作成して使用することもできます。

ビジネス・ホスト・クラスには構成可能なターゲットが含まれています。それらのいくつかを下の図に示します。



その他の構成可能なターゲットの詳細は、[設定のリファレンス](#)を参照してください。

3

プロダクションの構成

ここでは、EDIFACT ルーティング・インタフェースを組み込むようにプロダクションを構成する方法について説明します。[\[相互運用性\]](#)→[\[構成\]](#)→[\[プロダクション\]](#) ページで実行するタスクについて説明します。[次の項目](#)では追加のタスクを紹介しします。

3.1 EDIFACT ビジネス・サービスの追加

プロダクションが受信するドキュメント・タイプごとに 1 つずつの EDIFACT ビジネス・サービスを追加します。このドキュメント・タイプが複数の通信モード (FTP と TCP など) を経由して到着する場合は、通信モードごとのビジネス・サービスが必要になります。

EDIFACT ビジネス・サービスをプロダクションに追加するには、ビジネス・サービス・ウィザードを[通常どおり](#)使用します。“[プロダクションの構成](#)”を参照してください。[\[サービス・クラス\]](#) リストから以下のクラスのいずれかを選択します。

- `EnsLib.EDI.EDIFACT.Service.FileService`
- `EnsLib.EDI.EDIFACT.Service.FTPService`
- `EnsLib.EDI.EDIFACT.Service.HTTPService`

3.2 EDIFACT ルーティング・プロセスの追加

ルーティング・プロセスをプロダクションに追加するには、ビジネス・プロセス・ウィザードを[通常どおり](#)使用します。“[プロダクションの構成](#)”を参照してください。[\[プロセス・クラス\]](#) リストから `EnsLib.MsgRouter.VDocRoutingEngine` を選択します。

3.3 EDIFACT ビジネス・オペレーションの追加

出力先ごとに 1 つずつの EDIFACT ビジネス・オペレーションを追加します。

不正なメッセージを処理するためのビジネス・オペレーションを追加することもできます (背景については、“[仮想ドキュメント用のビジネス・プロセス](#)”を参照してください)。

EDIFACT ビジネス・オペレーションをプロダクションに追加するには、ビジネス・オペレーション・ウィザードを[通常どおり](#) 使用します。“[プロダクションの構成](#)”を参照してください。[\[オペレーション・クラス\]](#) リストから以下のクラスのいずれかを選択します。

- ・ `EnsLib.EDI.EDIFACT.Operation.FileOperation`
- ・ `EnsLib.EDI.EDIFACT.Operation.FTPOperation`
- ・ `EnsLib.EDI.EDIFACT.Operation.HTTPOperation`

3.4 EDIFACT ビジネス・ホストの接続

EDIFACT ビジネス・ホストを追加したら、次のようにアイテムを接続します。

- ・ [EDIFACT ビジネス・サービス](#)ごとに、[EDIFACT ルーティング・プロセス](#)の名前として[ターゲット構成名](#)を指定します。
- ・ 必要なロジックを含む[ルーティング・ルール・セット](#)を作成します。[次の項目](#)を参照してください。
ルーティング・ルール・セットの場合は、[\[ターゲット\]](#) フィールドが EDIFACT ビジネス・オペレーションになっていることを確認します。
- ・ [EDIFACT ルーティング・プロセス](#)の場合は、[\[ビジネスルール名\]](#) 設定を指定します。新しいルーティング・ルール・セットの完全名を使用します。

3.5 ビジネス・ホストの構成

[設定のリファレンス](#)に示されているすべての設定を確認し、必要に応じて設定する必要があります。

EDIFACT ビジネス・サービスに関する主要な設定は次のとおりです。

- ・ [\[Docスキーマカテゴリ\]](#) – 受信ドキュメントに割り当てるスキーマ・カテゴリを指定します。InterSystems IRIS® 内で、この情報が検証や検索テーブルのインデックス作成に使用されます。
- ・ [\[テーブルクラス検索\]](#) – 受信ドキュメント内の仮想プロパティにインデックスを付けるために使用するクラスを指定します。
- ・ ファイルまたはFTP ビジネス・サービスの場合は、[\[リプライターゲット構成名\]](#) フィールドを構成する必要があるかどうかについても検討します。

[\[セパレータ\]](#) 設定も構成する必要があります。

4

追加の手順

ここでは、EDIFACT ルーティング・インタフェースをプロダクションに追加するために必要な追加の手順について説明します。これらのタスクはプロダクションが存在しているネームスペースで実行する必要があります。ルール・セット、変換、および検索テーブルを作成する場合は、予約パッケージ名を使用しないでください。[“予約パッケージ名”](#)を参照してください。

[“検証ロジックの上書き”](#)も参照してください。

4.1 EDIFACT スキーマの InterSystems IRIS へのロード

EDIFACT スキーマを InterSystems IRIS® にロードするには、[“使用可能なツール”](#)の説明に従って、[\[EDIFACT スキーマ構造\]](#) ページを使用します。

カスタム・スキーマ・カテゴリの作成の詳細は、[“カスタム・スキーマ・カテゴリの作成”](#)を参照してください。

4.2 EDIFACT 用のルーティング・ルール・セットの定義

ビジネス・ルールの定義に関する一般情報は、[“ビジネス・ルールの開発”](#)を参照してください。

EDIFACT ルーティング・インタフェース用のルーティング・ルール・セットを作成する場合：

- ・ **[一般]** タブで、**[ルールタイプ]** を **[仮想ドキュメント・メッセージ・ルーティング・ルール]** にする必要があります。この選択によって以下のオプションが設定されます。
 - － **[ルール・アシスト・クラス]** は `EnsLib.MsgRouter.VDocRuleAssist` になるはずです。
 - － **[コンテキスト・クラス]** は `EnsLib.MsgRouter.VDocRouting Engine` になるはずです。
- ・ ルールに関する **[制約]** で、**[メッセージ・クラス]** を `EnsLib.EDI.EDIFACT.Document` に指定します。

4.3 EDIFACT 用の DTL データ変換の定義

ルーティング・ルールに、1 つ以上のデータ変換が必要な場合があります。

DTL データ変換の定義に関する一般情報は、[“DTL 変換の開発”](#)を参照してください。

EDIFACT ドキュメント用の DTL データ変換を作成する場合：

- ・ **[変換]** タブで、**[ソースクラス]** と **[ターゲットクラス]** の両方を **EnsLib.EDI.EDIFACT.Document** にする必要があります。
- ・ **[ソースドキュメントタイプ]** はビジネス・サービスによって割り当てられたスキーマ・カテゴリ名にする必要があります。
- ・ **[ターゲットドキュメントタイプ]** はターゲット・スキーマ・カテゴリの名前にする必要があります。これは、InterSystems IRIS にロードしたスキーマ・カテゴリ名と同じにする必要があります。

“使用可能なツール” の説明に従って、**[EDIFACT ドキュメント・ビュー]** ページを使用して変換をテストします。

DTL データ変換をプロダクションに統合するには、**ルーティング・ルール・セット** の **[変換]** フィールドにそのパッケージとクラスの完全名を入力します。

4.4 EDIFACT 検索テーブルの定義

EDIFACT 検索テーブル・クラスの **EnsLib.EDI.EDIFACT.SearchTable** は、自動的に、EDIFACT ドキュメント ID にインデックスを付けて、**Identifier** という名前にします。

検索する項目を増やす場合は、サブクラスを作成できます。サブクラスは、**Identifier** プロパティに加えて、検索テーブルを機能させるインフラストラクチャを継承します。詳細は、“**検索テーブル・クラスの定義**” を参照してください。

EDIFACT に固有の以下の点に注意してください。

- ・ このドキュメントの最後に記載されている **[セパレータ]** 設定のリファレンスで、EDIFACT セパレータ文字のリストを参照してください。
- ・ この場合は、InterSystems IRIS が **PropType** の追加の値をサポートしています。“プロダクション内での仮想ドキュメントの使用法” に列挙されたタイプのほかに、**DateTime:HL7** を使用できます。

4.5 EDIFACT ドキュメントの繰り返しの処理

EDIFACT ドキュメントの一部のセグメントは、繰り返すことも、ループ内で使用することもできます。繰り返しおよびループ構造は、明示的または暗黙的のいずれかにできます。InterSystems IRIS は、暗黙的または明示的な繰り返し構造とループ構造を処理できますが、ドキュメントでは、繰り返しとループをすべて明示的に指定するか、またはすべて暗黙的に指定する必要があります。InterSystems IRIS は、EDIFACT ドキュメントを解析中に最初の繰り返しまたはループを検出すると、ドキュメントが暗黙的繰り返しを使用しているか、明示的繰り返しを使用しているかを判別します。その後、最初の繰り返しまたはループで見つかったメカニズムを使用してドキュメントの残りの部分を解析します。明示的繰り返しメカニズムと暗黙的繰り返しメカニズムが混在している場合、InterSystems IRIS は、EDIFACT ドキュメントを解析中にこれをエラーとして処理します。

EDIFACT ドキュメントが暗黙的繰り返しの使用を示している場合、セグメントは 3 文字のラベル (UNH など) として表され、その後にデータ要素区切り文字とデータ (データ要素とコンポーネント) が続きます。特定のセグメントがどのセグメントの繰り返しまたはループに入っているかを明示的に示す情報はありません。しかし、EDIFACT ドキュメントが明示的繰り返しの使用を示している場合、繰り返しセグメントは 3 文字のラベルで表され、その後にコンポーネント区切り文字と制御番号が続き、さらにデータ要素区切り文字が続きます。繰り返しセグメントである ARA というセグメントでは、これは ARA:1+データのようになります。グループ 1 内でネストされているグループ 2 にある DET というセグメントでは、これは DET:1:1+データのようになります。これらの制御番号を使用して表されるのは、繰り返しが可能か、ループ内にあるセグメントのみです。

デフォルトで、EDIFACT ドキュメントは、ファイルへの出力時に、暗黙的繰り返しまたは明示的繰り返しの指示を保持します。暗黙的指示がある EDIFACT ドキュメントを明示的指示に変換するには `ConstructExplicitClone` メソッドを使用し、明示的指示のある EDIFACT ドキュメントを暗黙的指示に変換するには `ConstructExplicitClone` メソッドを使用します。

EDIFACT設定のリファレンス

ここでは、[EDIFACT ビジネス・サービス](#)および[EDIFACT ビジネス・オペレーション](#)の設定に関する参照情報を提供します。

ルーティング・プロセス (EnsLib.MsgRouter.VDocRoutingEngine) の設定に関する詳細は、“[仮想ドキュメント・ルーティング・プロセスの設定](#)”を参照してください。

EDIFACT ビジネス・サービスに関する設定

EDIFACT ビジネス・サービスの設定に関する参照情報を提供します。

概要

EDIFACT ビジネス・サービスには次のような設定があります。

グループ	設定
基本設定	[ターゲット構成名]、[Docスキーマカテゴリ]
追加設定	[リプライターゲット構成名]、[テーブルクラス検索]、[検証]、[リプライモード]、[バッチハンドリング]、[ローカルアプリケーションID]、[新規ライン許容]

残りの設定は、すべてのビジネス・サービスに共通しているか、アダプタのタイプによって異なるかのどちらかです。詳細は、以下を参照してください。

- ・ [すべてのビジネス・サービスに含まれる設定](#)
- ・ [ファイル受信アダプタに関する設定](#)
- ・ [FTP 受信アダプタの設定](#)
- ・ [HTTP 受信アダプタの設定](#)

[バッチ処理]

プロダクションで受信した受信バッチ Interchange ドキュメントの取り扱い方法を指定します。選択項目は、以下のとおりです。

- ・ [] – 子ドキュメントを個別に処理しません。累積してバッチ全体を 1 つの複合ドキュメントとして送信します。
- ・ [1] – 1 つのセッションの一部としてバッチ内の各ドキュメントを転送します。セッションには、バッチのヘッダ・セグメントとトレーラ・セグメントを含む最終的な親ドキュメント・オブジェクトが含まれます。
- ・ [] – バッチの各ドキュメントを専用のセッションで転送した後、バッチのヘッダ・セグメントとトレーラ・セグメントを含む親ドキュメント・オブジェクトを転送します。
- ・ [] – バッチの各子ドキュメントを専用のセッションで転送します。親バッチ・ドキュメント・オブジェクトは転送しません。

[Docスキーマカテゴリ]

完全な **DocType** 仕様を生成するために受信 EDIFACT ドキュメント・タイプ名に適用するカテゴリ。ドキュメント・タイプ名と組み合わせると、**DocType** 割り当てを生成できます。この設定では、複数のタイプ名をカンマ区切りリストで指定することもできます。それぞれのタイプとして宣言したドキュメントに適用する **DocTypeCategory** の値または完全な **DocType** の値も、このリストでタイプ名の後に = で続けて指定できます。

タイプ名の一部分を指定してその末尾にアスタリスク(*)を付けると、その部分名で始まるすべてのタイプと一致します。

以下に例を示します。

D96A,REC*=D04A,REQOTE=D05B

DocType 割り当ては、[検証] または [テーブルクラス検索] のインデックス付けに必要な場合があることに注意してください。

[ローカル・アプリケーション ID]

このビジネス・サービスを介して EDIFACT ドキュメントを受け取る機能とアプリケーションを表す、コロンで区切られた LocalID:Qualifier コード。これらは、応答ドキュメントのヘッダを作成するために使用されます。@ (アット・マーク) 文字は、受信メッセージの対応するフィールドを使用することを表します。リテラルの @ 記号を ID の中で使用する必要がある場合は、\@ のように円記号でエスケープします。デフォルト値は EDIFACTService:ENS です。

[応答モード]

応答の処理およびデータ交換で受信後直ちに応答ドキュメントを返すかどうかを制御します。[応答モード] では、次の値を指定できます。

- ・ [] – 応答をすぐには返しません。これがデフォルトです。
- ・ [] – データ交換ですべてのトランザクション・セットに対して応答を生成します。
- ・ [] – エラーが検出されたトランザクション・セットに対してのみ応答を生成します。
- ・ [] – エラーなしで受け入れたトランザクション・セットに対してのみ応答を生成します。

[応答ターゲット構成名]

(File および FTP のみ) プロダクションの中でビジネス・サービスがあらゆる EDIFACT 応答メッセージの転送先とする必要がある構成項目のカンマ区切りのリスト。通常、リストには、1 つの項目が含まれますが、それ以上の項目数の場合があります。リストには、ビジネス・プロセスとビジネス・オペレーションの両方を指定できます。

[ターゲット構成名] と比較してください。

[検索テーブル・クラス]

受信ドキュメント内の仮想プロパティにインデックスを付けるために使用するクラスを指定します。デフォルトは EnsLib.EDI.EDIFACT.SearchTable です。異なるクラスを使用するには、“[EDIFACT 検索テーブルの定義](#)”を参照してください。

いずれの場合も、[Docスキーマカテゴリ]で指定されたカテゴリに、検索テーブル・クラス内の DocType 値 (存在する場合) が含まれていることを確認します。

[ターゲット構成名]

EDIFACT ドキュメントの送信先となる構成項目のカンマ区切りリスト。このフィールドの値は、プロダクション内の以下の 1 つ以上の項目の構成名である必要があります。

- ・ ルーティング・プロセス (ルーティング・インタフェース用)
- ・ ビジネス・オペレーション (設計上、このインタフェースのルーティング・プロセスを省略し、受信ビジネス・サービスから送信ビジネス・オペレーションに単にドキュメントを渡すだけの場合)

[リプライターゲット構成名] と比較してください。

[新規行の許容]

真または偽。真の場合は、読みやすくするためにファイルの中で新規行文字がセグメント終端文字の後 (または終端文字に代わって) に挿入されている場合でも、ビジネス・サービスは受信したファイルをエラーなしで処理します。偽の場合は、追加されたこれらの新規行文字がトリガとなり、ファイル解析時にエラーが発生します。デフォルトは真です。

[検証]

“[ビジネス・サービスに関する設定](#)” の “[検証](#)” を参照してください。

また、[セパレータ] 設定のリファレンス情報も参照してください。

EDIFACT ビジネス・オペレーションに関する設定

EDIFACT ビジネス・オペレーションの設定に関する参照情報を提供します。

概要

EDIFACT ビジネス・オペレーションには次のような設定があります。

グループ	設定
基本設定	[ファイル名]
追加設定	[親セグメント自動バッチ] 、 [セパレータ] 、 [テーブルクラス検索] 、 [検証] 、 [リプライコードアクション] 、 [切断中は失敗としない]

残りの設定は、すべてのビジネス・オペレーションに共通しているか、アダプタのタイプによって異なるかのどちらかです。詳細は、以下を参照してください。

- ・ [すべてのビジネス・オペレーションに含まれる設定](#)
- ・ [ファイル送信アダプタに関する設定](#)
- ・ [FTP 送信アダプタの設定](#)
- ・ [HTTP 送信アダプタの設定](#)

[自動バッチの親セグメント]

(File および FTP のみ) 真の場合、バッチの親を持つメッセージを記述すると、最初にバッチ・ヘッダが出力され、最後のバッチ親ヘッダ・メッセージまたはファイル名の変更によりトリガされるとさらにバッチ・トレーラが出力されます。バッチの親メッセージの子メッセージは、以前に[\[自動バッチの親セグメント\]](#)が真のときに記述済みでない限り、すべて記述されます。

[ファイル名]

(File および FTP のみ) ターゲット・ファイル名。[\[ファイル・パス\]](#) アダプタ設定はこのファイルのパスを決定しますが、[\[ファイル名\]](#) は名前を決定します。[\[ファイル名\]](#) には、タイム・スタンプ指定子を含めることができます。[\[ファイル名\]](#) を空白にしておくと、デフォルトで、%f_%Q というタイム・スタンプ指定子が使用されます。

- ・ %f は、データ・ソースの名前（この場合は入力ファイル名）を表します。
- ・ _ は、リテラルのアンダースコア文字で、出力ファイル名に表示されます。
- ・ %Q は、ODBC 形式の日付と時刻を表します。

書式コード %f に具体的な値を使用すると、その値に使用している | ? \ / : [] < > & , ; NUL BEL TAB CR LF の各文字はすべて削除され、空白は下線 (_)、スラッシュ (/) はハイフン (-)、コロン (:) はドット (.) にそれぞれ置き換えられます。

“[ファイル名に関するタイム・スタンプ指定](#)” を参照してください。

[切断中のエラー生成の停止]

(HTTP のみ) 真の場合、切断されている間は[\[再試行タイムアウト\]](#)で指定されている秒数のカウントを中断します。[\[再試行タイムアウト\]](#)が -1 または[\[接続を維持\]](#)が 0 の場合は適用されません。

[応答コードのアクション]

(HTTP のみ) さまざまな応答ステータス状態に応じてこのプロセスで実行するアクションを指定するコードをカンマ区切りで記述したリスト。“[リプライコードアクション](#)”を参照してください。

HTTP アダプタはその他にも可能性のある値を提供します。“[クラス・リファレンス](#)”の `EnsLib.EDI.EDIFACT.Operation.ReplyStandard` に関するエントリ内の詳細を参照してください。

[テーブルクラス検索]

“[EDIFACT ビジネス・サービスに関する設定](#)”の“[テーブルクラス検索](#)”を参照してください。

[セパレータ]

送信 EDIFACT ドキュメントをエンコードするための区切り文字として使用される文字を指定する文字列。

[セパレータ] には最大で 7 文字を入力でき、そのデフォルト値は `:+?*'\r\n` です。それぞれの入力文字は左から右の順に次のように解釈されます。

位置	区切り文字	デフォルト値
1	コンポーネント区切り文字	: (コロン)
2	データ要素区切り文字	+ (プラス記号)
3	エスケープ区切り文字	? (疑問符)
4	繰り返し区切り文字	* (アスタリスク)
5	セグメント終端文字	' (アポストロフィ)
6-7	セグメント終端文字の附属文字	\r\n (改行)

[セパレータ] の文字列が空の場合は、それぞれの EDIFACT ドキュメント内で指定された区切り文字値が使用されます。

位置 6 ~ 7 の文字は、セグメント終端文字の後ろに付加されます。既定では `\r\n` がこれらの位置にあり、`\r` (ASCII 13) は復改を表し、`\n` (ASCII 10) は行フィードを表します。これらの文字は改行の役割を果たすため、各セグメントは出力において独自の行に表示されます。

注釈 疑問符(?) は、区切り文字として予約されている文字のエスケープ文字としても機能します。InterSystems IRIS では、EDIFACT メッセージ内の以前は区切り文字ではなかったが現在は予約されている文字はすべて自動的にエスケープされます。逆に、以前は予約されていたが現在は予約されていない文字はすべてアンエスケープされます。例えば、^ がドキュメント内の既定の Component Separator であった場合に、: を新たなコンポーネント区切り文字として設定した場合は、: という文字はすべて ?: という形でエスケープされ、^ という区切り文字はすべて : に変換され、エスケープされた ?^ という文字列はすべて ^ に変換されます。

[検証]

実行する検証のタイプを指定する文字列。詳細は、“[Class Reference](#)”の `EnsLib.EDI.EDIFACT.Validator` のエントリを参照してください。0 以外の文字列を指定すると、基本的な検証が呼び出されます。

